



オニヒトデ原寸大(直径約30cm)

5匹のオニヒトデが折り重なっているのがわかるかな?

オニヒトデの

世界各地のサンゴ礁で、サンゴを餌とするオニヒトデの大発生がたびたび報告されていますが、ここ沖縄でも大きな問題となっています。海水温上昇や海洋汚染など、環境の悪化でサンゴ礁生態系の回復力低下が心配されているなか、一度壊滅的な被害を受けると回復に非常に長い時間がかかってしまうか、もしくは回復できなくなる恐れがあります。

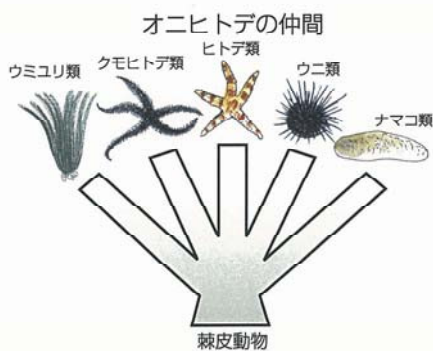
好物はサンゴ

◆オニヒトデも生態系の一員

オニヒトデはサンゴを食い荒らす悪者のイメージがありますが、ナマコやウニ、ヒトデなど棘皮動物の仲間、れっきとしたサンゴ礁生態系の一員です。オニヒトデがミドリイシ類など成長の早い種類を好んで食べる傾向にあるため、成長の遅い種類のサンゴが生息できる場所ができ、種の多様性を高める効果があるとも考えられています。とはいえ、オニヒトデの大発生によってサンゴが激減すると、サンゴ礁生態系全体が大きな影響を受け、生き物がほとんどいなくなります。いまのところ、オニヒトデ大発生の原因は解明されておらず、抜本的な策は見い出せていないため、分布を調査したうえで駆除するという方法がとられています。



小指の爪ほどもない子供時代のオニヒトデ(原寸大)は、もっぱら桃色をしたサンゴモ(石灰藻類)を食べて大きくなります。



◆沖縄におけるオニヒトデ大発生

沖縄では、1950年代、70年代に大発生が確認され、サンゴ礁は大きな影響を受けました。その後、1990年代後半から2003年までに、沖縄島や慶良間、周辺の島々で、04年以降には宮古、06年以降に八重山で大発生が確認されています。沖縄県の官民協働のオニヒトデ対策では、「守るべき」、「守りたい」、「守られる」を条件とした一定範囲のサンゴ礁で、地域のボランティアらを中心とした駆除活動が今も続けられており、サンゴ礁を健全な状態に保つという成果をあげつつあります。



オニヒトデは、サンゴをかじり取るのではなく、体の下側にある口から胃を外に出し、サンゴの組織だけを直接消化吸収します。食べられた直後のサンゴは、写真のように真っ白な骨格がむき出しになります。やがて、藻類などに覆われると、生き物が少なく色彩の乏しい褐色の景観になります。(八重干瀬・宮古、2005年)

(画:西平守孝,日本のサンゴ礁,環境省)

◆オニヒトデ簡易調査マニュアルによる調査

オニヒトデの発生状況の調査はスノーケルにより15分間に観察したオニヒトデの個体数を記録するもので、一般の人が簡単に行えます。調査結果は4段階で評価されます(通常分布:0~1個体、要注意:2~4個体、準大量発生:5~9個体、大発生:10個体以上)。

(参照URL: www3.pref.okinawa.jp/site/view/contview.jsp?cateid=70&id=2274&page=1)